

資本主義的發展に伴う食の変容

——日本における植物油供給体制の形成過程——

平賀緑

要旨

本論文は、農と食が資本蓄積体制に組み込まれ物質的かつ社会的に変容されてきたとの問題意識に基づき、資本主義的發展に伴う「食」の変容を明らかにするための一考察として、19世紀後半から1970年代初頭までの日本を対象に、植物油の生産、供給および消費を急増させた植物油供給体制の形成過程を政治経済学的に明らかにした。

まず第1章では、理論的枠組みとして「食」と資本主義を考える研究視座を検討した。米欧における「農業・食料の社会学」を中心に先行研究を整理し、「資本による農業の包摂」に関する諸研究、アグリフードビジネスの垂直的・水平的統合の構造解明、食と資本主義の歴史を課題とするフードレジーム論をそれぞれ概観した。本論文は中でもフードレジーム論による「農業・食料複合体」概念に注目し、農業・工業・食料を組み込んだ資本蓄積体制である複合体が、自らの資本蓄積を増強するため能動的に農業と食料を取り込みかつ変容させていくダイナミクスを捉えられるための有効な概念と考え、これを援用した。さらに、既存のフードレジーム論では軽視されていた農業・食料複合体のレジームを貫く継続的な発展過程を解明することによって同理論を補強するために、複合体を構成した財閥や総合商社、大手製油企業などに関する経済史・経営史の蓄積が厚い日本の油脂および関連産業の発展を事例として取り上げた。

第2章では、植物油を取り上げる意義と、数値データの不足による研究の制約を指摘し、それを乗り越えるために経済過程（産業分析）と政治過程（政策分析）の接合を志向する政治経済学アプローチに基づく研究方法を提示した。

第3章～第6章において、日本における植物油複合体の歴史的な形成過程を検討した。第3章では、満洲産大豆に依存した近代的製油産業誕生の背景に、国内への資本蓄積と産業革命、国際貿易の推進、アジア進出を図る近代的国家建設プロジェクトがあったこと、その国策遂行の一環として、財閥・政商、国策会社、それらに支えられた大手製油企業が、大資本主導による機械制大工業として大豆粕製造・大豆搾油業を創出したことを明らかにした。臨海部に建設された「海工場」で輸入原料から大量生産された大豆粕は、日本農業の近代化に貢献し、間接的に産業革命そして日本の資本主義的發展を支えた。一方、国内に市場を持たなかった大豆油は欧米に輸出して国際貿易を発展させた。

第4章では、輸入原料と輸出市場に依存して誕生し、第一次世界大戦期の特需に乗じて急成長した近代的油脂産業が、同大戦後に輸出市場を失った大量生産商品の販売先を必要として、供給側から積極的に食用・工業用・軍需用の多方面における植物油と大豆粕の用途拡大

と市場開拓に尽力したことを明らかにした。折からの油脂工学における技術革新も活用しつつ、企業が積極的に新商品開発と販売促進活動を展開し、その一環として食用大豆油の発売も行われた。さらに、日本が戦時体制を強める中、日本が掌握していた満洲産大豆と朝鮮・日本近海産の魚油から製造する大豆蛋白と油脂は重要な軍需関係品と見做され、政府・軍部による統制の下、大手企業を中心に油脂産業は戦時中も生産、技術革新、設備投資を続けていた。

第5章では、工業用・軍需用を中心に強固な生産基盤を終戦までに確立していた大手油脂企業が、戦後は米国から政策的に大量輸入された大豆を活用して再建し、食用に市場を拡大していったことを明らかにした。既存の「海工場」の生産能力に、敗戦後急遽増産が推奨された国産ナタネや、それを搾油する小規模な「山工場」は太刀打ちできなかったと考えられる。戦前から継続された輸入原料への依存体制は、戦後の国土開発計画の一環で進められた食品コンビナート構想などによってさらに強化され、主に米国から輸入された穀物・油糧種子を「海工場」で処理し、国内の加工食品産業や飼料産業へ供給する体制が確立された。

第6章では、過剰生産気味だった油脂業界と日米両政府・政府関連機関が、むしろ供給側から植物油の市場拡大を図って油脂の需要増加を促したことを指摘した。一方では、個人消費を促すために油脂業界と日本政府機関によるイベントや日米共同広報事業による「油をもっと摂りましょう」という消費増進運動が展開された。他方では、豊富な油脂を使うマーガリン・ショートニング産業や即席麺産業、その他の加工食品産業が発展し、油脂の大口需要者となった。大豆粕についても、米国から導入された加工型畜産が飼料用に大豆粕の需要を押し上げた。油と粕を大量消費する食料システムの構築には総合商社の役割も大きかった。

こうして、近代に肥料用豆粕製造業として誕生した製油産業は、終戦まで工業資材産業、化学産業、重要軍需産業として発展し、第二次世界大戦後には食品産業へと転身した。この植物油複合体によって植物油は安く豊富で身近な「食品」として広められたのである。

終章では、植物油供給体制の形成過程の検討を踏まえた上で、資本主義的發展に伴う「食」の変容を明らかにする研究視座として、1) 世界的なフードレジームにおける日本の近代的食料システムの形成、2) 植物油複合体の形成とレジームを貫いた継続的な発展、3) 複合体による能動的な農と食の変容および「資本による食の包摂」を提起した。